

鹿3 引鹿の群 = = = 猪・鹿・狸より

前に言うた追分は、二〇年前までは鹿の鳴音が聞かれた。もうその頃は、何処にも聞かれなくなって後のことであった。街道筋でこそあったが、どっちを向いても山の陰で、家数も五、六しかなかった。前を寒狭川が流れて、流れに臨んで山が押っ被さるように聳えていた。秋の日の暮々には、その山の峯で盛んに鳴いていたのである。闇を透して「キョー」と鋭く響いた時は、馴れぬ客などは、飛び上がるほどびっくりしたそうである。かつて段戸山の山小屋にいた杣が、附近で鳴いた鹿の声を、山犬が吠えたと勘違いして、一晚慄え通した話があった。もっともそれは鹿が遊牝の時に限って、稀に唸るような声をあげる、それであったと言うから、無理もない話であった。鹿の声は普通に鳴くのも、相当の距離を置かないと、「カンヨー」と、妙な音には聞こえなんだそうである。

今でこそ追分の向いの山は、杉桧が植林されて、雑木などもしたがって伸び放題であるが、以前は見渡す限りの山が、ことごとく近郷の草刈場で、峯に処々形の面白い松があったほか、木と言うてはほとんどなかった。冬の夜はそこで盛んに山犬が吠えたものと言う。

入梅が明けて、山の色が一段と濃くなった頃には、朝早くそこを幾組かの引鹿が通ったそうである。引鹿とは、夜の間麓近く出て餌を漁ったのが、夜明けとともに山奥へ引き上げるそれを言うたのである。あたかもその頃は鹿が毛替りして、赤毛の美しい盛りであった。それが朝露のおいた緑の草生を行っただけに、ことに目を惹いたのである。五つ、六つあるいは一五、六列も一列になって、山の彼方此方を引いて行った光景は、たとえようもない見事だったと言うた。中には小鹿を連れているものもあった。それらの歩きぶりを見ていると、まるでピッコ(子馬)を曳くようだったそうである。ある時など、全体どれだけいるかと言うて、目に入るだけを数え立てると、四十幾ついたと言うた。毎朝のことだったが、門に立って全部が引き揚げるまで



追分の向いの山

眺め暮らしたもので、中には朝日が赤く峯に映ってから、ゆうゆう引いて行くものもあった。それがまだ昨日のことのようだと、老人の一人は語っていた。

寒中風のひゅうひゅう吹き捲る日に、峯から三つの猟犬に追われて、崩れるようにタワを降って来て、川の中へ飛び込んで、犬と鹿と四つが真っ黒になって、互いに纏れ合っているのに、後を追ってきた狩人たちも、鉄砲を向けたまま放すことが出来なくて、ぼんやり立っていたこともあった。そうかと思うと、まだ、日のあるうちに、山犬に追われて岩の上を走る鹿を、畑に耕作しながら、見たこともあったと言う。

もう五〇年も前になるが、中根某がある日前の寒狭川の河原から、山犬が喰い剩して砂原に埋めておいた鹿を拾って来た。近所隣へも振舞って、自分も煮て喰ったところが、その晩遅くなってから、門口へ山犬が来て、恐ろしく吠え立てたそうである。某はそれに驚いて、家の中からさんざん詫びたそうであるが、その声が軒を隔てた隣家まで聞こえたと言う。翌朝起きる早々に塩を柵に入れて、ゆんべは辛い目に遇ったと言いい、前の河原へ置きに行ったと言うた。山犬の獲物を取って来る時は、引換えに塩を置くものとは、一般に言われていたことである。

その家は、街道筋の牛方相手の宿だった。今でも牛宿と呼んで残っている。